

51 モーゼス・マイモニデスの生涯

泉 彪之助

演者は、中世のユダヤ人思想家・医学者モーゼス・マイモニデスの生涯を調べたところ、スペインのコルドバで生まれたがエジプトのカイロで活躍し、医学上の著作がすべてアラビア語で書かれているなど、今まで理解していたことと異なるのに気付いた。今回、その生涯を概観し、意義を考えたい。

モーゼス・マイモニデスは、一一三五年三月三十日、スペインのコルドバで生まれた。母は産後死去し、マイモニデスは父に育てられた。マイモニデスが十三才のとき、コルドバはアルモハド族に占領され、その支配下におかれた。アルモハド族は北アフリカに住むベルベル人のイスラム教強硬派で、モロッコにムワッヒド朝を開き、南スペインにも勢力を伸ばした。

その後マイモニデスについて、二説がある。コルドバをはなれて南スペインと北アフリカを転々としたとする説と、隠れユダヤ教徒としてコルドバにとどまり、弾圧がはげしくなったためコルドバをはなれたとする説である。いずれにせよ、マイモニデスが二十五才のとき、一家はモロッコのフェズに移り、五年間住んだ。

マイモニデスの受けた医学教育について、史料が少ない。イブン・ズフル（アベンゾアル）から影響を受けたことは確実である。その他の影響を受けたアラブ医学者として、アペロエス、イブン・トゥファイル、アベンパケの弟子などが挙げられている。

マイモニデスが三十才のとき、一家はフェズをはなれ、パレスチナのアッコとエルサレムを経て、エジプトのカイロ（フスタート）に定住した。父が死去し、貿易商を営んでいた兄が海難事故で死去したので、マイモニデスは生活のため医師を開業し、一方ユダヤ人共同体の宗教的指導者としても活躍した。

マイモニデスの医師としての評価は高く、エジプトの支配者サラディンの宮廷の侍医となり、その後サラディ

ンの息子にも仕えた。十字軍に従軍していた英国リチャード(獅子心王)にも招かれたが、ことわっている。侍医・開業医としての多忙な生活の中で、マイモニデスは宗教・哲学・医学の重要な業績を残した。

マイモニデスの医学的業績は、もつとも重要な『モーゼス・マイモニデスの医学箴言集』をはじめ、十種の著作が現存している。その範囲は、臨床医学・歯科医学・薬学から環境医学・心身医学にもおよんでいる。医学的業績の内容は、機会を改めて報告したい。これらの医学的業績とマイモニデスの最高の哲学的達成とされる『迷える人々への手引』は、アラビア語、とくにヘブライ文字を使用したアラビア語で書かれた。

一二〇四年十二月十三日、モーゼス・マイモニデスはカイロで死去し、遺志によりパレスチナのガリラヤ湖畔ティベリアに葬られた。マイモニデスの一人息子アブラハムは十七才であったが、後に父と同じく医師・宗教学家となった。マイモニデスの墓については、別稿で報告した。

イスラム社会に生活したユダヤ人医師で、医学上のみ

ならず宗教・哲学上の優れた業績を上げ、ユダヤ人コミュニティの指導者としても活躍したマイモニデスの生涯は、多くの問題を提起している。

(老人保健施設 陽翠の里)